

〔報告〕

在宅看護における異学年交流授業の教育効果の検討

A Study on educational effect in the home nursing classes consists of students in different years

作山 美智子¹⁾, 安藤 莉香¹⁾, 小笠原 喜美代²⁾, 仙石 美枝子²⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

2) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科非常勤講師

要旨

本研究の目的は、A 大学在宅看護授業において、技術演習とロールプレイを通して実施した異学年交流授業の教育効果を検討することである。2020年7月にCOVID-19対策のために臨地実習が学内演習に切り変わった在宅看護実習生（4年次生）13名と在宅看護方法論を受講する3年次生61名を対象に異学年交流授業を実施した。授業後の振り返りの「異学年交流は効果があったか」の間に「非常にあり」と回答した4年次生の評定平均値は3.5点、3年次生は3.6点で0.1ポイント3年次生が4年次生より高かった。また、記述内容から3年次生は【実習経験からのアドバイス】、【知識・理解を深める】、【教育環境の充実】、【実習への拡大】、【看護観】を、4年次生は【楽しい】、【自己成長の確認】、【回想】、【学び力を高める】のカテゴリが抽出され、今回の異学年交流授業の試みは、コロナ禍において一定の教育効果が得られたといえる。

【キーワード】異学年交流授業、在宅看護、COVID-19

I. はじめに

看護学における臨地実習は専門職として必要な対象者へのケアやコミュニケーションを通して、社会人として必要な対人関係から社会的マナーに至る様々なことを体験学習する機会のある場である（厚生労働省；2019、原；1993、真壁ら；1999、明石；1997）。一方、演習授業の到達点としては単なる看護者のスキルの修得ではなく、対象者の病態像や心理状態のみならず生活背景や生活歴等、対象者をまるごと理解した対応が実施できることが望まれる。そのため具体的な教育方法としてロールプレイング演習、事例設定演習、模擬患者技術演習で患者役割・看護師役割を演じることで得られた患者の気持ちが理解でき援助技術の留意点に気づくことができるとする研究など、さまざまな演習方法の分析（浅川、2011）が報告され

ている。

さて、世界中で大流行するCOVID-19によりその感染対策から、A 大学在宅看護領域実習（4年次生）は学内演習に代替された。直接的コミュニケーションが必要とされる在宅看護方法論（3年次生）は遠隔授業から学内授業に切り替えられたのは2020年6月からであった。今回、4年次生の在宅看護実習受講生と3年次生の在宅看護方法論受講生に対し交流授業を実施した。

交流授業は初等・中等教育においてよく実施され報告も行われている。一方、看護教育では前田ら（2014）の初年次教育の基礎ゼミに異学年交流授業を取り入れた報告はあるものの看護の専門科目における異学年交流に関する研究はみあたらない。本研究は在宅看護方法論授業における4年次生と3年次生の異学年交流授業を実施し、その教育的効果について検討することである。

用語の説明と定義

COVID-19：新型コロナウイルス感染症

異学年交流授業：学年が異なる学生に対し、
合同で実施される授業で、学生間においては
支援場面や交流機会がある。

II. 研究目的

在宅看護方法論（3年次生）の授業に4年次生
が参加する異学年交流授業を実施し、その教育効
果を検討する。

III. 研究方法

1. 4年次生の学内における在宅看護実習

概要 4年次生13名の在宅看護実習生は3～
4名ずつのグループ編成になって、Table1の課
題に取り組んだ。アネロイドによる血圧測定は学
生一人ずつ在宅看護担当教員2名と非常勤講師2
名の計4名で技術評価を行った（100分）。事例に
関するロールプレイはグループごとに演習と発表
を行い教員4名がコメントした（100分×2）。3
年次生との交流授業の前に4年次生の演習は終了
していた。

期間 2020年6月29日～7月10日

2. 3年次生の在宅看護方法論 I

概要 Fig.1に示す。在宅看護方法論 I 受講生
61名を3～4名ずつのグループ編成にし、2つの
教室を使い密集・密着・密閉対策を行い、マスク
の着用、換気する等の感染対策を実施し Table1
の課題に取り組んだ。1グループに4年次生が1
名入り、わからないことへの対応とアドバイスを
する、とした。人数が足りないグループには教員
が参加した。アネロイドによる血圧測定は4年次
生が技術チェックリストに従いグループの3年次
生の技術を確認した（1回目：100分×2）。事例
に関するロールプレイは演習発表を最後の時間と
とり、教員がコメントを行った（2回目：100分
×3）。

期間 2020年6月30日、7月7日

Table1 授業展開と内容

授業回数	項目	内容
1回目	血圧測定	感染防止に配慮したアネロイド血圧計を使った血圧測定
		事例1 Bさん、93歳、女性。長男（70歳、単身、無職）と2人暮らし。脳梗塞の後遺症（軽度の歩行障害程度）があり、要介護1の認定を受けている。介護保険を利用し毎週水曜日に、健康観察と生活リハビリテーションを目的に訪問看護（60分未満）を利用している。自宅内での生活は自立しているが、1人での外出は難しい。
2回目	食事介助演習※	事例2 Aさん、81歳、男性。3年前にパーキンソン病と診断され、すくみ足、小刻み歩行、軽い振戦があるため、服薬にて経過を観察中である。現在、訪問看護サービスを利用している。 妻（79歳、無職）との2人暮らし。子どもはおらず、近隣に近親者はいない。妻は関節リウマチを患っており、介護保険で要支援1の認定を受けている。 自宅は急峻な坂を上った高台にある2階建ての戸建て（持ち家）。古い木造住宅で、玄関ポーチや、家屋内にも段差が多い。廊下は狭く薄暗い上、手すりは取り付けられておらず、浴室の浴槽はまたぎが高い。寝具は、訪問看護師からたびたび介護用ベッドを勧められているが、「落ち着かない」と、夫婦ともに和式布団を使用している。

※上記2事例のなかからグループ毎に事例を選択、場面設定を行い演習（ロールプレイ）を実施する。

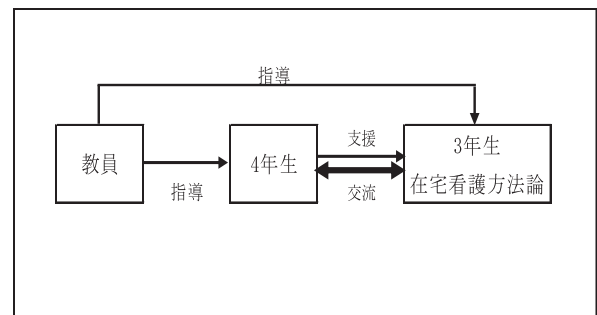


Fig.1 異学年交流授業の全体像

3. 演習における指導項目

演習課題のポイントとなる項目は次の通りである。

1) アネロイド血圧計による血圧測定 (Table2)

「身だしなみ」、「使用物品の準備」に感染予防のためのマスク装着と物品をアルコールで消毒を追加、「使用物品の点検・確認」、「インフォームドコンセント」、「測定部位の動脈の確認」、「マンシェットの巻き方」、「送気球の扱い方」、「血圧測定」、「後片付けと記録」に物品をアルコールで消毒する内容を追加し、9中項目、20小項目で確認した。

Table2 アネロイド血圧測定の評価視点

中項目	小項目 (各1点)
身だしなみ	1. 決められた通りのユニフォームの着用 (ボロシャツ、実習靴、チノパンツ)
	2. 髪をきちんとまとめている。アクセサリー等を外している
	3. 爪は短く切っている
使用物品の準備	1. 感染予防策としてマスクを直用しアルコール手指消毒を実施済である
	2. 物品準備: アネロイド血圧計、聴診器、アルコール綿、腰盆、
	3. 物品をアルコール綿で拭く
使用物品の点検	1. 血圧計・聴診器の点検
インフォームドコンセント	1. 血圧を測定することを療養者に説明し、同意を得る
	2. 測定終了後の説明: 血圧値をどのように伝えるのか
測定する動脈の確認	1. 上腕動脈の確認
	2. 桡骨動脈の確認
マンシエットの巻き方	1. 着衣に応じた準備
	2. マンシエットの位置と巻き方
送気球の扱い方	1. 送気球の持ち方
	2. マンシエットへの空気の入れ方・抜き方
血圧測定	1. 聴診器の位置
	2. 送気球のねじを緩めて減圧 (1拍動に2mmHg程度 下げる) し聴診器で聴く
後片付けと記録	1. マンシエットの外し方
	2. 記録の仕方
	3. 使用物品をアルコールで消毒 (マンシエットの消毒・収納、聴診器の消毒)

Table3 食事指導のロールプレイ評価視点 4～1点

1 ユニフォームの着こなし
2 対象の病態を理解している
3 対象の残存機能の理解
4 対象の情報をアセスメントできている
5 家庭における感染予防は理解できている
6 食事指導の必要性を理解している
7 対象にあった食事指導になっている
8 食事指導の方法・内容は適切である
9 対象と家族にあった計画になっている
10 関心・意欲・態度

2) 事例 (食事指導) のロールプレイ (Table3)

「ユニフォームの着こなし」、「対象の病態の理解」、「対象の残存機能の理解」、「対象の情報アセスメント」、「家庭における感染予防の理解」、「食事指導の必要性の理解」、「対象にあった食事指導になっているか」、「食事指導の方法・内容の適切さ」、「対象と家族にあった計画になっているか」、「関心・意欲・態度」の10項目について4年次生と3年次生は自己評価を実施した。

4. 交流授業の振り返り調査票

振り返り調査票は臨地実習の評価や看護技術

評価に関連した先行研究 (原;1993、真壁ら;1999、浅川;2011、小林ら;2000) を参考に自作の質問紙を作成した。「演習の技術指導」、「説明の仕方」、「あなたの関心・意欲」、「あなたの受講態度」、「異学年交流は効果があったか」の5項目を1～4の4件法で「非常に高・よい」4点、「そうでない」1点の配点とした。演習でよかったことについては自由記載とした。

5. データ分析方法

択一式質問 (5項目4件法) の回答については得点数の評定平均値を比較した。自由記載については記述内容を「コード」化し内容の類似性に基づき体系化し、「コード」化したものから類似性からサブカテゴリし、さらに高次概念で【カテゴリ】化した。一致するまで研究者間で検討した。

6. 倫理的配慮

学生には研究の目的、個人情報の保護、研究参加の任意性および参加の有無は成績とは無関係であること、協力しないことによる不利益がないことを書面と口頭で説明し回答をもって同意とした。なお、所属大学の研究倫理審査委員会の承認 (第20-07号) を得て実施した。

IV. 結果

回収した調査票は3年次生61名分 (回収率100%)、4年次生13名分 (回収率100%) だった。

1. 択一式質問 (5項目) 結果

学年別の評定平均値結果を Fig.2に示す。4年次生は「あなたの演習の技術指導」、「あなたの説明のし方は」は、それぞれ3.2/4点、3.5/4点だった。一方、3年次生は4年次生に対する「演習の技術指導」、「説明の仕方の適切さ」について、それぞれ3.6/4点、3.6/4点と4年次生の自己評価得点よりは高かった。「異学年交流は効果があったか」に4年次生は3.5/4点、3年次生は3.6/4点で、4年次生より0.1ポイント高かった。

Table4 3年次生：異学年交流でよかったことの記述内容の分類結果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード内容	度数	%	
実習経験からのアドバイス	実践からのアドバイス	自分たちにより近い年齢で知識量の多い先輩からの意見は身近かな存在だからこ そわかる気がした。	4		
		自分たちには先輩たちが見つかなかったが、他の班はそのおかげか発表が良かった	1		
	身近な存在	先輩から直接アドバイスをもらえたのが自分の中に入ってきやすかった。	4		
		先輩からアドバイスを頂く時、学生からの目線でも考えてくれるので納得しやす かった。	1	41.3%	
		自分たちには無い視点からのアドバイスをもらうことができた。	15		
知識・理解を 深める	知識理解を深める	先生一人では教えていくのに限界はあるが、1グループに1人が教えてくれる人 がいるのでスムーズに進む	1		
		実際に体験したことを踏まえながら教えて頂いたのでわかりやすかった	5		
		私たち3年次生では気づかなかったことなどを4年次生は気付いてくれて、学習 を続けると身に着くのだと感じた。	3		
			先輩が今までの知識を教えて頂いたので私自身の知識が深まり、不足している分 の指導を受けよい演習を行えた。	5	
	ロールプレイによる 実践感	実際に状況を自分たちで設定して、必要なケアや支援を考えて実践することで覚 えやすくなり、復習にもなるのでよかった。	3	42.9%	
	知識を膨らませる	分からないことがあったりしたらすぐに聞くことが出来たり、先輩からの違う視 点からの考えも理解することができた。血圧測定のポイントも聞きやすかった り、楽しみながら演習ができた。	4		
	他者の意見から自身 を高める	自分に足りなかった部分を他のグループの意見から聞いて良かった。	5		
教育環境の充 実	教育環境の良好さ	自分ではわからなくても先輩たちが教えてくれたので、よりよい授業になった。 在宅看護で大切なこと、ケアをする中で行うことの必要性、目的をさらに理解す ることができた。	2		
		4年次生が優しくアドバイスをしてくれて、戸惑うことなく演習が行えたのが良 かった	3		
		ロールプレイについて意見をもらったり、バイタルサインの測定について指導し てもらいとても勉強になった。	2	7.9%	
実習への拡大	実習の話題	実習に関する話をする機会があった。アドバイスがもらえた。	3		
		4年次生のアドバイスや指導を聞くことによって、実習に活かすことが出来そう だった。	1	6.3%	
看護観	看護観に触れる	4年次生の看護観に触れることができ新たな学びがあった。	1	1.6%	
			計	63 100%	

Table5 4年次生：異学年交流でよかったことの記述内容の分類結果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード内容	度数	%
楽しい	交流・楽しい	単純に交流する機会があまりないので、関わるのがとても楽しかった。	1	8.3%
自己成長の確認	経験知の伝達	自分達がロールプレイなどで先生からいただいた助言や、自分たちが工夫した点、臨地実 習で学んで活かしたことなどを3年生にも伝えることが出来てよかった。	2	
		教えるということは自分もわかっていないといけなため、知識の再確認のきっかけになった。	41.7%	
	自身の成長を実感	アドバイスをする立場となり、利用者様とその家族とのかかわり方で注意する点に気づけた 3年次生と4年次生の違いを見て、自分が実習を学べてきている実感がわいた。	3	
回想	3年次を思い出す	3年次生と交流することができ、当時の緊張感や不安だったことを思い出し良い刺激と なった。	2	16.7%
学び力を高める	3年次生からの学び	自分たちでは思いつかなかった援助指導について学ぶことができた。	1	
		自分の力を高められた。	1	
	他者からの学び	様々な角度から技術を見て意見交換できた。	1	33.3%
		自分なりの表現を出せたロールプレイが行えたこと自分だけでなく集団で行うことで、自 分に足りないこと、参考にしたいことなどが多くあった。	1	
			計	12 100%

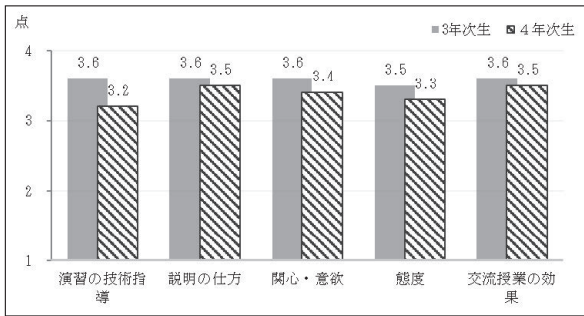


Fig.2 交流授業の自己評価

2. 記述内容の分類結果

1) 3年次生の記述内容の分類結果を Table4に示す。【実習経験からのアドバイス】、【知識・理解を深める】、【教育環境の充実】、【実習への拡大】、【看護観】の5つのカテゴリが抽出された。

【実習経験からのアドバイス】のカテゴリは<実践からのアドバイス>、<身近な存在>の2サブカテゴリから構成された。「自分たちに近い年齢で知識量の多い先輩からの意見は、身近な存在だからこそわかる気がした」、「先輩から直接アドバイスをもらったのが、自分の中に入ってきやすかった」、「自分たちにはない視点からのアドバイスをもらうことができた」などのコードより生成された。

【知識・理解を深める】のカテゴリは<ロールプレイによる実践感>、<知識を膨らませる>、<他者の意見から自身を高める>などの4サブカテゴリから構成された。これらは「実際に体験したことを踏まえながら教えて頂いたのでわかりやすかった」、「自分に足りなかった部分を他のグループの意見から聞いて良かった」などのコードより生成された。

【教育環境の充実】のカテゴリは<教育環境の良好さ>の1つのサブカテゴリから構成された。また、「4年次生が優しくアドバイスをしてくれて、戸惑うことなく演習が行えたのが良かった」などのコードより生成された。

【実習への拡大】のカテゴリは<実習の話題>の1つのサブカテゴリから構成された。また、「4年次生のアドバイスや指導を聞くことによって、

実習に活かすことができそうだった」などのコードより生成された。

【看護観】のカテゴリは<看護観に触れる>の1つのサブカテゴリから構成された。また、「4年次生の看護観に触れることができ新たな学びがあった」のコードより生成された。

2) 4年次生の記述内容の分類結果を Table5に示す。【楽しい】、【自己成長の確認】、【回想】、【学び力を高める】の4つのカテゴリが抽出された。

【楽しい】のカテゴリは<交流・楽しい>の1つのサブカテゴリから構成された。また、「単純に交流する機会があまりないので、関わるのがとても楽しかった」のコードより生成された。

【自己成長の確認】のカテゴリは<経験値の伝達>、<自身の成長を実感>の2つのサブカテゴリから構成された。また、「教えるということは自分もわかっていないといけなため、知識の再確認のきっかけになった」、「3年次生と4年次生の違いを見て、自分たちが実習を学べてきている実感がわいた」などのコードより生成された。

【回想】のカテゴリは<3年次を思い出す>の1つのサブカテゴリから構成された。また、「3年次生と交流することができ、当時の緊張感や不安だったことを思い出し良い刺激になった」のコードより生成された。

【学び力を高める】のカテゴリは<3年生からの学び>、<他者からの学び>の2サブカテゴリから構成された。また、「自分たちでは思いつかなかった援助指導について学ぶことができた」、「様々な角度から技術を見て意見交換できた」などのコードより生成された。

V. 考察

A 大学では通常であれば4年次生の前期は、臨床実習で大学内にはいない状況である。図らずも COVID-19対策のために、実習が学内演習に切り替えられ、今回、特別の状況ゆえの交流授業の実現であった。

自己評価から

択一式質問において、3年次生は4年次生に比し、すべての項目において高かった。「演習の技術指導」、「説明の仕方の適切さ」、「異学年交流は効果があったか」について、よかったと受け止めていた。一方、4年次生の「あなたの演習の技術指導」の自己評価は（非常に良い：4点、38.5%）で受け手である3年次生より23.8ポイント低かった。臨地実習を半年前の3年次に体験して臨床現場を知っており、学生自身はまだ納得した評価になってなかったのではないだろうか。

堀ら（2002）は実習の場で学生は、看護する喜びや難しさを知り、自己の新たな発見を実感したりすることを述べている。臨地実習を体験した4年次生は自身ができていること、できていないことを深く自覚しているものと考ええる。

また、3年次生からは交流授業は効果があったとする回答において、「非常によい（4点）」とするものは72.1%と多かった。これから始まる臨地実習に対する不安に、4年次生がさまざまなメッセージで対応してくれたこと、また、この時期は遠隔授業から対面授業に移行して1ヶ月程度で、授業後に友人達とおしゃべりする様子等から、コミュニケーションをとることについて学生たちは渴望していたようにも推察される。

自由記載

3年次生の立場から

3年次生の記述から<ロールプレイによる実践感>やロールプレイからの学びがあったことを述べており、これは4年次生からも同様にあがってきている。一般にロールプレイの限界として川嶋ら（2005）は単一学年演習であることからリアリティの欠如を挙げている。しかし、今回は、臨地実習を半年前の3年次後期に体験している4年次生がそばにいてことによって、【実習経験からのアドバイス】、【知識・理解を深める】、【教育環境の充実】がよかったこととして抽出されている。そして、経験知に富んだ知識・対応におけるマナーにも言及したアドバイスがあり、この限界はクリ

アできたと考える。

特に3年次生は臨地実習の経験のある4年次生からアドバイスがもらえたこと、実習のことや就職のこと、さらには看護観についても触れることができ、信頼できる現実性のある情報を4年次生から得たいと考えていたように伺える。また、3年次生は実習に対する不安が強く、不安だということを出している。それに対し4年次生は1年前には同じ気持ちであり、実習体験によってそれは緩和されるものであることなども交流によって伝えている。

例えばアネロイド式血圧測定は、単なる技術だけがポンとあるのではなくその周辺にはコミュニケーションやケアが存在する。3年次生は間もなく臨地実習が始まるという状況であったため、4年次生からの助言は伝わりやすかったと推察される。

4年次生の立場から

さて、看護実習ガイドライン（2020年）では、専門科目としての看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適応する能力を修得する授業が看護学実習である、とされている。4年次生は3年次生に教える体験によって【楽しい】という内的変化と3年次の時を【回想】し、自分が成長していることを確認し、【自己成長の確認】、【学び力を高める】が抽出されている。

3年次生と4年次生の交流授業は先輩後輩関係からの緊張感がある一方、臨床現場のプリセプターシップのような看護の理解を深化させる支援とフォローする関係性があった。方法論の演習としては効果があったと考える。

本研究の意義と限界

本研究にはいくつかの限界がある。調査対象となった4年次生の母数は少なく4年次生を捉えるにはやや課題がある。また、4年次生の人数が足りないため、3年次生のグループに教員が対応したグループがあった。授業最後に、臨地実習に向けたアドバイスを4年次生が発表して授業を終了したが、「実習のことを聞いて良かった」という

声が複数あがった。COVID-19状況下で大学内への入構が段階的に解禁されていたため、直接的コミュニケーションがなかなか取り難い環境であったことも異学年交流授業の評価を押し上げていると考える。

https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf (2020.11.4 アクセス)

VI. 結論

異学年交流授業後の択一式質問での3年次生、4年次生は異学年交流授業の効果はあるかの問いに3.6/4点、3.5/4点だった。自由記載における質的分析の結果では、交流授業でよかったことに関して3年次生からは【実習経験からのアドバイス】、【知識・理解を深める】、【教育環境の充実】、【実習への拡大】、【看護観】、4年次生からは【楽しい】、【自己成長の確認】、【回想】、【学び力を高める】のカテゴリが抽出された。

文献

- 明石恵子, 水溪雅子, 真田弘美, 他 (1997). 臨地実習における学習効果と課題、看護教育, 38 (2), 112-117.
- 浅川和美 (2011). 基礎看護技術教育に関する現状と課題－2004年～2010年に発表された基礎看護 技術教育研究の分析－, Yamanashi Nursing Journal, 9 (2), 1-6.
- 原美子 (1993). 実態調査から見た臨地実習とその教育上の課題、看護教育, 34 (13) : 1070-1090.
- 堀美紀子, 三浦浩美, 大浦まり子, 他 (2002). 看護基礎教育における看護技術教育一本学の課題一, 香川県立医療短期大学看護学科, 4, 165-173.
- 川嶋麻子, 野口多恵子, 丹恵子, 他 (2005). 基礎看護領域における看護実践能力の育成に向けた演習の試みと課題－看護基本技術の修得に向けて－, 山口県立大学看護学部紀要, 9, 57-65.
- 小林ミチ子, 西脇洋子, 岡村典子 (2000). 基礎看護技術演習過程の評価の検討：演習過程に対する学生と教員の認識の相違, 新潟県立看護短期大学紀要, 6, 13-25.
- 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書2019年10月15日
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
(2020.11.4 アクセス)
- 前田由紀子, 石田佳奈子, 梶原江美, 他 (2014). 看護系大学における異学年交流授業の教育効果に関する検討, 西南女学院大学紀要, 18, 23-31.
- 真壁五月, 野島良子 (1999). 看護学臨地実習における学生の行動型と成長発達過程, 日本看護研究学会雑誌, 22 (4), 27-47.
- 日本看護系大学協議会2020年3月30日. 大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会 第二次報告, 看護実習ガイドライン,